

九州天皇家論 3章 神武東征

九州天皇家の誕生

「179萬2470余歳」は110年

「東征」に際して、神武は奇妙な？数字を述べている。

天祖の降跡りましてより以逮、今に一百七十九萬二千四百七十余歳

曾祖父、瓊瓊杵尊の降臨から「179萬2470余年」経ったというのである。何を言うか！人類はまだ誕生してないぞ。果たして、この数字は何なのであろうか。全くでたらめな数字なのであろうか。幸い訓みが打ってある。その通りに読んでみよう。

- (1) ももよろずとせあまり
- (2) ななそよろずとせあまり
- (3) ここのよろずとせあまり
- (4) ふたちとせあまり
- (5) よほとせあまり
- (6) ななそとせあまり

この訓みは最も古い時代の日本語の訓みであろう。私たちが子どもの頃の昭和20年代にもこのような訓みがあった。「一つとせ・・・」「ふたとせ・・・」という数え歌があった記憶がある。この訓みのままに数字にしてみよう。

「千」の位の上は「よろず(萬)」の位を付けている。しかし、実数としては考慮しなくていいであろう。現代数学の厳密な位取りとしての「萬」とは異なる。万葉集の「萬の葉(世)」と同じ使い方であろう。実数は「100余」「70余」「9余」「2000余」「400余」「70余」となる。

- (1) ももよろずとせあまり……………100余
- (2) ななそよろずとせあまり……………70余
- (3) ここのよろずとせあまり……………9余
- (4) ふたちとせあまり……………2000余
- (5) よほとせあまり……………400余
- (6) ななそとせあまり……………70余

これは何か。それぞれが独立して記述されている。これは線分図の表記方法である。「余」を省略して、線分図に書き移してみよう。

線分図を使った記録方法



この数字は、「時の記録」である。時間の記録方法としては間違いが少なく、また分かりやすい賢明な記録方法といえる。木材に切れ目を入れる、紐を結ぶなど、記録は簡単にできる。墨が手に入った後は、墨で書いて残していけば永久に保存できたであろう。

神武は天孫ニニギ降臨から今までこれだけ時間が経過してきたという。「179萬2470年」は現代数学の位取りの実数ではない。これは「線分図」で記録した年数である。従って、その年数はこれらの数字の総和となる。

$$100+70+9+2000+400+70=2649年$$

使用されていた24倍暦

これを現代の暦に換算すると何年になるか。当時は太陰暦の記録である。だが、太陰暦の1年は一定ではない。1年をいかなる期間としていたかによって大きく異なる。ニニギ尊の時代の人々は1年をどう考えていたか。

1カ月を1年と考えていたのならば、12年が現代の1年となる。これは十二倍暦である。また、6ヶ月を1年と考えていたならば、2年が現代の1年となる。これは二倍暦である。古事記は、神武は吉備に8年滞在したと伝える。阿岐國には7年である。これは二倍暦と考えられる。そうすると、神武が実際に滞在したのは、吉備が4年、阿岐が3年半となる。

では、天孫ニニギの尊が降臨した時代は1年はどの長さだったのか。神武が述べたこの数字から考えて、半月(15日)が1年だったのではないだろうか。新月から満月までを1年とする。満月から新月までをまた1年。半月(15日)を1年と見るのは原初の太陰暦ということになるであろう。1カ月(30日)は2年となる。

では、現在の1年(365日)は当時の暦では何年となるか。 計算は $365 \div 15 = 24$ となる。現在の1年は当時の暦では24年である。これは二十四倍暦である。

神武が云った年数は線分図の記録に基づく数字である。その総和は2649年となる。この数字は二十四倍暦での年数であると考えて、現在の暦に換算してみよう。

$$2649年 \div 24 = 110余年$$

曾祖父、瓊瓊杵尊から神武までの四世代の年数として、110年は妥当な数字である。だが、果たしてこの時代に、二十四倍暦が使われていたのか。幸い、古事記には同時代の年数がもう一つだけ記録されている。

然れども。後者、其の伺みたまひし情を恨みたまへども、戀しき心に忍びずて、其の御子を治養しまつる縁に因りて其の弟、玉依毘賣に附けて、歌を獻りたまひき。其の歌に曰ひしく、

赤玉は 緒さへ光れど 白玉の 君が装し 貴くありけり

といひき。爾に其の比古遲、答へて歌ひたまひしく、

沖つ鳥 鴨著つ嶋に 我が率寝し 妹は忘れじ 世のことごとにと
うたひたまひき。

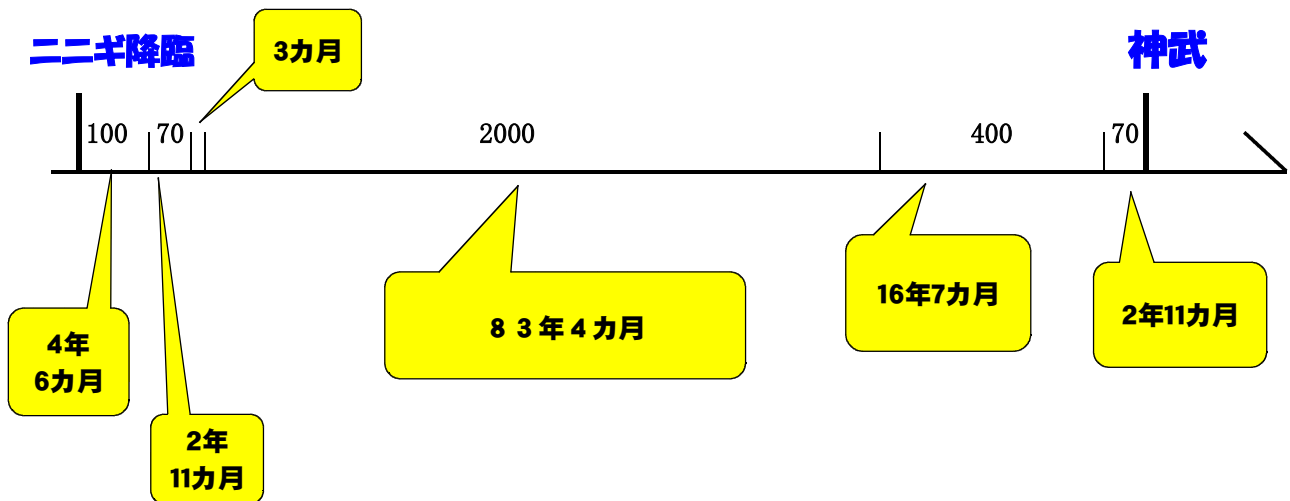
故、日子穗穗手見命は、高千穂の宮に、伍佰捌拾 坐しき。御陵は、即ち其の高千穂の山の西にあり。是の天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命、其の姨玉依毘賣命を娶して、生みませる御子の名は、五瀬命。次に稻氷命。次に御毛沼命。次に若御毛沼命、亦の名は豊御毛沼命、亦の名は神倭伊波禮毘古命。故、御毛沼命は、波の穂を跳みて常世國に渡り坐し、稻氷命は、妣の國と為て海原に入り坐しき。

「天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命」は神武の父である。神武の父は「高千穂の宮」に、「五百八十年」居たという。この年数も通常の人間にはありえない数字である。この年数も二十四倍暦で解いてみよう。

$$580年 \div 24 = 24年$$

これも妥当な数字である。「瓊瓊杵尊」の時代から神武の父の時代には二十四倍暦が用いられていたことになる。神武が述べた線分図の記録を二十四倍暦で現代の実年数に換算してみよう。

- (1) 「ももよろずとせあまり」……………4年6ヶ月
- (2) 「ななそよろずとせあまり」……………2年11ヶ月
- (3) 「このよろずとせあまり」……………3ヶ月
- (4) 「ふたとせあまり」……………83年4ヶ月
- (5) 「よほとせあまり」……………16年7ヶ月
- (6) 「ななそとせあまり」……………2年11ヶ月



古代数字「ち」「ほ」「そ」の意味

「100」は「もも」。これは現代でも使われている。山口百恵は「やまぐちももえ」である。「9」は「この」。「千」は「ち」。「2」は「ふた」。「4」は「よ」。此处までは現代とそんなに変わらない。

「400」となった場合は「100」は「ほ」と読む。「400」は「よほ」、だから「五百」は「いほ」でいい。「7」は「なな」。「70」が「ななそ」だから、「10」は「そ」である。「八十」を「やそ」と読むのも同じルールとなる。

古代日本語は単音が「一語」を表意していたことは既に研究されている。「あ」は「吾」、「た」は「手」、「な」は「汝」、「つ」は「津」、「ま」は「目」である。であれば、数詞の「ち」「ほ」「そ」も元々は「一単語」を表したと考えられる。

「ほ」は、恐らく、「穂」であろう。「稲穂」の粒数をおよそ「100」と見て、一穂を「100」としたのであろうか。だから「稲穂5つ」の数は、「5ほ」=「500」と数えた。

では、「そ」は何か。「指」ではないだろうか。身近な「10」は何と云っても「指」である。従って、「添える」は「指を当てる」の意味であろうか。「粗末」も「指先」であろう。

天武六年夏四月十一日に、織田史名倉、乗輿(きみ)を指斥(そし)りまつれりといふに座(よ)りて、伊豆嶋に流す

「指斥り」を「そしり」と読んでいる。「指」は「そ」の音を持つ。

「月夜見尊」の仕事は太陰暦作成

では、古代、誰がこの暦を記録していたのか。本当に線分図で暦を記録していたのか。誰かがやっていたというふうないい加減な事ではなく、すでに、瓊瓊杵尊の時代には、暦を記録する責任者がいたということである。

月の満ち欠けによって、「半月(15日)」を1年と計算する。1年を単位として線分図として記録する。従って、現代の1年の、春夏秋冬は24年となる。春は6年、夏は6年、秋は6年、冬は6年である。

当時の平均寿命がどのくらいか確かなことは分からないが、約30歳としてみよう。現代の30歳は、当時の年齢で云えば、720歳である。大きな数字で、現代の私たちにはピンとこないが、1年を「24年」として計算すれば10歳は240歳、20歳は480歳、30歳は720歳と換算できる。慣れればそれほど難しいことではない。

瓊瓊杵尊の小倉北区降臨から神武まで、太陰暦によるほぼ正確な年数が記録されていたと云える。では、誰が記録していたのか。暦は暦だけで意味があったのではなく、当然、農業と結び付いていたと思われる。春の種まき、秋の収穫を基本とした農業とそれに係わる朝廷の行事・新嘗祭等と結びついて暦が作成されたであろう。暦作成は、行政府の最高責任者の仕事だった。

その行政府最重要の仕事を「天(あま)」王朝の支配者、イザナギは誰に託したか。「一書(あるふみ)」の次の命令が的を射ている。

天照大神は、高天原を御すべし。月夜見尊は、日に配して天の事を知すべし。スサノヲは、
滄海之原を御すべし。

「天照大神」の任務は「高天原」の統治である。では「月夜見尊」の仕事は何か。「月夜見尊」は言い換えれば「月読み」である。「月を読む」、つまり、これは暦作成である。「月夜見尊」には、その名の通り、「月を読んで」、暦を作成し、「天の(仕)事を担え」と、命令したのである。イザナギは「月夜見尊」に「日に配して天の事を知らすべし」とその仕事を命じている。「天照大神」に与えた領土の“所有権”“統治権”ではなく、「月夜見尊」には行政府の最高責任者としての“行政権”を与えたのであろう。

瓊瓊杵尊降臨から神武まで、暦の線分図は六区分されている。その理由は行政府責任者の交代ではないだろうか。

天照大神は、「月夜見尊」に「葦原中国に住む保食神の下に行け」と命令した。この指示は行政上の任務である。「月夜見尊」はその任務に失敗したが、代行者の「復天熊人」が「粟」「稗」「麦」「豆」「蚕」を手に入れて帰ってくる。その結果、農業と養蚕が天(あま・彦島)に広がったというのである。

この説話から、「葦原中国(小倉北区)」では、既に農業と養蚕が行われていたことを示している。そこは「農業」「養蚕」の先進国だった。故に、「瑞穂の国」と呼ばれたのである。「天孫降臨」はこの稲作の先進地帯への侵攻であった。

時代は「海幸」に象徴される海を基本とした生活から、「山幸」、つまり、陸の農業を基本とした生活へと転換しようとしていたのである。農業生産力の発展は新たな水田を求めていた。「天孫降臨」はこの時代の転換を象徴した出来事だった。

新しい時代の舞台は、漁業に適した彦島、「天(あま)」から農業に適した水田地帯、小倉北区、「葦原中国」に移った。神武は「天孫降臨」を受け継ぎ、農業國、「葦原中国」を支配した「天(あま)王朝」の王であった。